

大木昭男様、（CC 高橋誠一郎様）

1月25日の例会、杉里直人報告「『カラマーゾフの兄弟』（水声社）を翻訳して」はまことに画期的で大変に素晴らしいものでした。報告者にも不満だったろうと思われるのは、質問者のレベルが噛み合っていなかったことでした。

二万円近い本で、そう誰でも買える価格ではなく、ドストの会、読書会の双方を含め、一人一人の会員が最寄りの図書館から始めて、全国の図書館にこの書を購入させる大きな運動を起こすべきと思われます。詳細な注釈付きのこの新訳は括目すべきであり、私自身すでに始めております。

さて、桜美林大名誉教授の大木昭夫さん

二次会で隣り合った縁で、貴君と早大露文科創立百年が話題になりました。

もう四、五年前だったでしょうか、露文専修の機関紙BECTBに露文科の創立者片上伸についての研究報告会の案内があり、報告者に貴君と柳富子さんの名が挙げられていました。出席しようと思っていて都合で出られず、後日、トルストイの会で柳に会い、「どんな話をしたのですか」と尋ねますと、「わたし（そんな集まりのことは）何にも知りません」ということでした。ずいぶんいい加減な通知だったようですね。

その後昨年になって同じくBECTBに今年（？）が創立百年の記事を見て、無関心ではすまず、たまたま高橋誠一郎君の近著『「罪と罰」受容と「立憲主義」の危機』の謹呈を受けましたので、36枚の文を草し、拙HPに掲載しました。（成文社のHPからも見られます）。この書が昭和十年代に言及していることで、私としてはこの中で露文科の百年に触れることになりました（6～7ページに該当箇所があります）。

露文科の「百年」の特徴は何でありましょうか。それは昭和十年代のまるまる十年この学科が閉鎖されていて第一回の卒業生の岡沢秀虎がひとり専任講師（後に助教授？）として残り、ロシア語・文学を講じていたことです。学科としては閉鎖されていて戦後に復活していることです。鹿島保夫、新谷敬三郎などはこの時期に岡沢に習った学生でした。

1934（昭9）年学科の閉鎖を見越してその必要を感じたのでしょうか、岡沢は雑誌『露西亜文学研究』（1号のみで終刊）を発行、ペレヴェルゼフの「ドストエフスキーと革命」および「ロシア批評に現れたドストエフスキー」をペンネームで訳載しています。後者はその結びが「ただマルクス主義文芸批評のみがドストエフスキーを解明しえたのである」と終わるものでした。そして彼は編集後記で「この訳載だけによっても本誌の価値は高い」と自賛しています。三笠書房からドストエフスキー作品全集が刊行され始めたこの年、岡沢は本体であるペレヴェルゼフ『ドストエフスキーの創造』の全十八章のうちラスコーリニコフとイワン・カラマーゾフに係わる二つの章を他の商業誌に訳載しています。

英文科教授だった片上伸は二度目のロシア遊学によってロシア革命とレーニン主義に開眼し、主として『中央公論』誌上に一連の論文を発表、多大な影響を及ぼし、蔵原惟人の訪

ソにも影響を及ぼしました。しかし注目されるのは、より若く、松山高等学校生だった宮本顯治の場合であって、彼は愛媛県出身の片上に講演を依頼、片上は受けております。1939年に谷崎精二の編集で片上伸選集三巻が刊行され、そのうちの一卷は書簡集に当てられていますが、宮本宛の手紙を見ることができます。片上は「こんな若者が日本にいるとは！」と感嘆・惚れ込んでいる様子がと読みとれます。

片上の緒論によって文芸評論に開眼した宮本は1929年『改造』の懸賞に応募、芥川龍之介を論じた「敗北の文学」により、小林秀雄の二位を抑えて一位で当選。その後、すぐ、「過渡時代の道標一片上伸論」を書き、「小林秀雄論」へと進みました。

戦後1956年には岡沢は学部の授業で「宮本君は早大露文に来るはずだったのです。片上先生が（早稲田を）止められたので、東大経済に行きました」と語っていました。

これに先立って戦後早い時期の文章で、岡沢は「片上伸論で最も優れているのは宮本顯治のものである」と記しました。まことにそれは26日に貴君が見せてくれた貴論に記されている通りです。しかしその際私が申し、貴君が同意されたように、岡沢はすぐに続けて「しかし私はこれ（宮本）を超えようと思う」と記しました。自分おほうかはるかに片上を直接に知っていると思う自負が言わせたものですが、さて、岡沢はその後20年ぐらひは生きたはずなのですが、ついに片上論を書きませんでした。つまりは「超ええないことが分かった」ためと推定されます。

思うに岡沢秀虎は奇妙な癖のある人でした。先に挙げたラスコーリニコフとイワン・カラマーゾフについて二つのペレヴェルゼフの論文は全文が翻訳であるにもかかわらず岡沢の名で発表され、前者は末尾に「（もっぱらペレヴェルゼフによる）」と括弧して注記していますが、後者にはそれさえもなく、岡沢の執筆とされています。そしてさらに戦後の、教科書にも使われた単行本『ロシア文学論攷：ツルゲーネフ・トルストイ・ドストエフスキー』のうち、ドストエフスキーの全文は自分がかつて訳したペレヴェルゼフ論文の翻訳とみなされます。ただしそれはまったく伏され、私はこの人の「19世紀ロシア文学」を授業で聴講していますが、ペレヴェルゼフの名はまったく聞いていないのです。

さてここで松尾隆（木寺黎二）が登場することになります。水野忠夫が「木寺黎二って、松尾さんのことですか」と素っ頓狂な声をあげたのを思い出しますが、戦前はペンネームで活動しました。木寺は長崎県島原の生家の浄土真宗の寺、黎二はレーニンと考証されます。英文卒、大学院では仏文の吉江喬松に師事、第一高等学院で英語を担当、ロシア文学、とくにドストエフスキーとシェストフに傾倒、参考文献に文集『松尾隆』（1986）および『早稲田・1950年・史料と証言』（1998～2000）に私、長瀬が連載した全五回の「松尾隆」200枚（拙HPに全文掲載）があります。先輩の岡沢のペレヴェルゼフ関連の仕事を横目で睨みながら、自著『ドストエフスキー文献考』に『ドストエフスキーの創造』の本体を「画期的な名著」と紹介しています。た多面的な人で『早稲田文学』誌上で抵抗文学を励ます文学論を巻頭論文として発表、大東亜戦争勃発直前に筆を絶ちます。そして没（1956）後三十年経

って私によって明らかにされ、1989年に全訳刊行されるのですが、『ドストエフスキーの創造』の翻訳に向かいました。

ただし完成せずに敗戦を迎え、本名に戻り、日本共産党に入党、古在由重、宮本顯治と親交を結び、平和運動、マルクス主義哲学の啓蒙、学生運動への助言を行いました。

名前が変わったこともあり、世間は文学からは離れたと思っており、また当人も哲学者を自認任していた。ところが小林秀雄の『ドストエフスキーの生活』を丹念に読んだ埴谷雄高が、『文献考』に紹介されていたE・H・カーの『ドストエフスキー伝』の翻訳とみなされると語り、これが吹聴されて騒動となった。判定者として木寺黎二が復活し、新聞に執筆、当の小林が面識の無かった松尾を家に訪ねる事態となりました。こうして雑誌『思潮』主催、編集長窪川鶴次郎司会、木寺黎二、埴谷雄高、中村真一郎（発言順）による長時間座談会「ドストエフスキーをめぐる」が行われました。木寺黎二は結論的に述べています。「ドストエフスキーの特性を成すものは、観念的なディアレクティクが支えているからだと思う。私が会話を重視するのは、彼の弁証法がいちばんいきいきと出ているのは会話だからです。弁証法だから、観念的なものであったにしろ、いちおうヘーゲルの場合と同じように、現実のなにか正しいものをつかんでいると思う」。ペレヴェルゼフとは合致していても、矛盾していません。しかしその名は一度も口にすることなく四十九歳で他界。

「卒論は何でしたか」と大木さんに問われて「レオーノフ」と答えました。貴君は『ロシアの森』を賞賛し、『泥棒』にも言及しました。後者の改作版は1965年に原卓也訳で出、江川卓が長い解説を書いています。「ドストエフスキーの伝統のほとんど唯一の継承者」と記され、また「アインシュタインの愛読書はドストエフスキーだった。芸術理論家にとって最大のテーマがここにある」というレオーノフの言葉が紹介されています。これらは一緒に研究会をしていた頃、私が言い、氏が同意した文言なのですが、私は生活のため会社員になりロシア文学を離れました。

そして江川氏はこの追及の方には向かわず、逆に『謎解き「罪と罰」』の方向に向かい、木下豊房氏の厳しい批判を招くことになっています。「作者を超える超越的存在」などという愚論を展開し、亀山郁夫は「その究極の模倣者」となったとする指摘はもっともです。しかし私は遅れかつ出生の樺太問題への回り道をしたのですが、再びこの方向に戻り向かったのです。その結果が『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』（2014、展望社）という作品です。

古川和男とはわが配偶者、すなわち『ヒロシマまでの長い道』（晩声社、1989）の女主人公とは、大分市で近くに住み幼馴染、早くから現行のウラン・プルトニウムの原発に反対し、安全・経済性に優れたトリウム熔融塩原子炉を追求・提唱してき科学技術者です。すでに1980年代末から兄弟で拙宅に訪ねて見えており、私はその著書『原発安全革命』（2001～、文芸春秋社）を謹呈されていました。しかしその真の値打ちを知るためには、2011年3・11のフクシマを待たねばなりませんでした。

その続編『導く力』を書き上げ、古い友人である物理学者の大槻義彦早大名誉教授に解説を書いてもらい、とりあえず昨年HPに掲げました。

そうこうしているうちに昨年9月6日に経済産業省の「社会的要請に応える革新的原子力技術開発事業」の公募で、私も株主の一人である古川和男のトリウム熔融塩原子炉 FUJI 実現のための会社TTS（トリウム・テック・ソリューション）に対し、年間一億五千万円（以後毎各年）の開発費交付の決定が公表されました。過去十回拒否されてきた挙句の採用です。私の『トリウム原子炉革命』の主張の承認でもあります。

この結果作品の拡充の必要が生じ、書き直しではなく書き足しの仕事にかかり、近く完成し先のものとは差し替える予定です。私はこのなかで今日のドストエフスキー問題についても言及しています。

以上、長くなりましたが、過日の会談の捕捉をさせてもらいました。露文科の行事に役立てば幸いです。

2020年2月5日

長瀬 隆

大木昭男様

書率パトリア『断層地帯』の第三部、221頁の真ん中、「ぼくはいま、エルミーロフの」から223p.までが該当します。もちろんここには岡沢・黒田の名は出てきません。しかしここに出てくる「主任教授」は岡沢以外ではありません。「教師というよりも、語学の切り売り商人」の文言が続きますが、私はこれを一読したとき、疑問の余地なくすぐに「黒田のことだ」と直感しました。ずっと後年小林氏に確かめましたが、笑っておりました。

これに続く「ぼくが尊敬していた教師」はズバリ横田瑞穂さんです。この箇所については、私のHPの露文科の亡友たちのなかの「小林勝」の項に詳述しています。

四、五年前でした。金本源之助さんを偲ぶ会がありまして、人と会うのが目的で出向きました。指名されて挨拶したのですが、この面接試問に触れました。私の1952年入学生からは大学院への進学者は一人も出なかったことを話しました。面接試問の後遺症のためでした。試問の教室には黒田さんもまた居たのですよ。

機会があれば、じっくりお話したいと願っております。

大木昭男さん

先の短信に付け加えます。

私に『微笑の沈黙』（1995、晩聲社）があります。これの126～138頁が岡沢秀虎（および松尾隆）について小林勝の小説を踏まえた上で詳記しております。『早稲田・1950・史料と証言』の諸稿はこの後のものになります。また私の後に川崎彰彦が単行本の『ぼくの早稲田時代』で言及していますが、重大なミスがあります。ただし1956年の「露文復活十周年」記念のセミナーでは貴重な証言をしています。これには講師として花田清輝と日野啓三（まだ作家ではなかった）、また学生からは、長瀬隆と富永守雄（北海道新聞、モスクワ特派をへて論説委員役員）が報告しています。川崎は埴谷雄高を引きずり出そうとしました。しかし埴谷は応ぜず、代わりに日野を推挙したのです。

埴谷が応じなかったのは、松尾隆＝木寺黎二へのコンプレックスのためでした。このことが証言されていて貴重です。セミナーには五木寛之は傍聴していたはずですから、彼は証言できるはずです。ずっと後に李恢成から直接聞きましたが、彼は新入生としてこれは傍聴しており、私の顔を覚えていました。木下豊房君はやはり新入生でしたが出ていなかったとのこと。

松尾隆は会場で傍聴していましたが、黙したままでした。埴谷さんは断わっていて良かった、と思ったことでしょう。終わって戸塚一丁目の自宅に松尾を送り、新宿での二次会に参加すべく向かいました。しかし迷ってたどり着かず、日野氏とばったり会い、二人だけでビールを飲み語り合いました。懐かしい思い出です。

当時の私はルカーチに心酔していて、エルミーロフを批判しつつ、その立場で報告したのですが、花田清輝からは「ずいぶんと公式的なことで」と冷やかされました。会場から松尾宅まで二人で歩いた時間は、松尾がペレヴェルゼフについて語るべき絶交の時間だったはずですが、何も語らなかった。

そしてその後にソ共20回党大会でのスターリン批判があり、暮れの十二月に逝きました。大隈小講堂での平和葬（日本平和委員会と日本ロシア文学会の共催）での宮本顯治、古在由家、出隆の弔辞は文集『松尾隆』（手持ちが有りますから差上げます）に全文が収録されています。米川正夫の自伝『鈍根才（歳？）』に松尾を「早大露文科の畏友」と記していますが、この米川さんはじめ露文科の先生たちはほぼ全員が出席していました。しかし続いて大隈会館で行われた、「偲ぶ会」に出たのは、黒田辰男さんだけでした。しかしながら、大物揃いの集まりで挨拶の指名を受けることはありませんでした。

私は黒田さんを東横線（田園調布？）のお宅に訪ねた（呼ばれた？）ことがあります、親しんだことはありませんでした。理由の最大なものは、1952年の面接試問で黒田さんは岡沢の近くに座って見ており、同罪だと見なしてきたからです。小林『断層地帯』の先にお

伝えた頁に「露文科の教師というのは、ぼくはそのほとんどが嫌いです」の文言がありますが、私は久しくこれに同感してきました。

貴君は黒田さんに師事、敬愛をもって書こうとしており、調べていらっしゃるようで、私が聞き知っていることをお伝えします。堺の豪商の家に生まれたおり、ロシア文学への開眼は世紀末のデカタンス詩にあったと思われます。プロレタリア文学の隆盛とともに、ゴーリキーなどに転じたとみなされます。戦後共産党に入ろうとしたそうですが、蔵原惟人が「思想的に弱い」という理由で退けたと聞いています。

すこし脇にそれますが、ロシア革命直後の時期日本で人気があったのはドストエフスキーではなく、その亜流のアルツィバーシェフ、ソログープらのデカタンスの文学でした。江川卓の父君の外村史郎などが中心的訳者でして、芥川龍之介、広津和郎等々に多大な影響を及ぼしています。広津が宮本のいう「同伴者」に留まったのも、芥川の「漠然たる不安」に影を落としたのも、一因はこれにありました。

蔵原惟人（府立一中で小林秀雄と同期のはず）は東京外語で外村の学生で、親しく馬場（外村）家に出入りしていた模様で江川さんは非常に幼いころから蔵原を知り、「おじちゃま」と呼んで親しんでいたようです。

大木さん、「どうしてそんなことを知っているのだ？」と貴君は問われると思います。私には江川さんとは非常に親しかった時期があり、氏は飲んで私の戸塚町の下宿に泊まったこともあるのです。1959年の正月には杉並の自宅に招いてくれています。来客は蔵原および山村房次、それと私の三人きりでした。その内輪の席で江川の母堂が蔵原氏を「おじちゃま」と呼ぶのです。幼かった長男の卓が「おじちゃま」と呼んでいたのも、それをそのまま延長・踏襲していて、「蔵原さん」とは一度も呼ばず不思議でした。

この「おじちゃま」蔵原が早大片上伸教授にプレハーノフの訳稿を託し、都新聞記者の資格でモスクワに遊学、帰って、片上没後のプロレタリア文化運動の理論的指導者となりました。逆に先生の外村が亡命者アルツィバーシェフから足を洗い、アルツィバーシェフの革命呪詛から「転向」し蔵原に従いソ連文学理論の翻訳者になりました。

外村は東京外語を退職後旧満州で職に就いていて、シベリアに抑留され、戦犯容疑で刑に服し、行方不明（？）のままに死去しています。これが彼のソ連とスターリン不信の端緒となり、読書新聞に書き、これを賞賛して私が樺太での敗戦体験を語ったことが、彼と私の親交の始まりとなりました。ソヴィエト研究会文学部会で私にレオーノフの報告をさせたのは彼です。それは先にお知らせしたように、レオーノフ『泥棒』の解説に現れています。

江川は父馬場（本名）史郎の「戦犯容疑」について追及してゆくうちに、誤りであったにしても疑われても仕方がなかった事象にぶつかったと思われます。ある時期から父についてぴたりと口を閉ざします。自嘲する以外になくなったようで、その頃から落語に凝りはじめたようです。五木寛之の「楽しいドストエフスキー」への共感と『謎解き「罪と罰」』でのその「実践」もまたこれによって説明されるでしょう。

1953 年露文入学のクラス会雑誌「凍河」に松延（五木）は毛沢東の文芸講話について書き、その中で毛が文学の目的として**向上**と**普及**を掲げていることを賞賛していた、と記憶します。久しく手元にこの雑誌は無く、松延が以下を引用したとは申しません。しかしこれが念頭に置かれての発言だったとは、私は記憶してきました。

「一部の同志たちは、普及をかなり、もしくはひどく、軽視あるいは無視し、向上を不適當に強調しようとしすぎた。向上は強調すべきであるが、一面的、孤立的に向上を強調し、不適當なまでにこれを強調するなら、それはあやまりである。だれのためのものかという問題が明確に解決されていないという、わたしがさきにあげた事実は、この点にもあらわれている。だれのためのものかということがはっきりしていないため、かれらのいう普及と向上には正しい基準がなく、当然のことながら、両者の正しい関係は見出すことができない」（新日本出版社「毛沢東選集」第三巻 96 p）。

もしも五木の「楽しいドストエフスキー」の提唱が、私の理解するとおりであるとするならば、五木に学んだとする江川の試みは見当違いということになるでしょう。また五木の提唱は舌足らずだったということになるでしょう。

勝野金政（1901～1977？）の名をご存知ですか。露文では岡沢、黒田よりも下、中退してパリに行き、後にモスクワに移り片山潜の秘書となる。ソ共に入党するもスパイ容疑で捕らえられ、バルト白海運河で強制（矯正）労働に就かされる。在モスクワの日本大使館に逃げ込み、その庇護のもとで日本に帰還、陸軍参謀本部のソ連課に勤務。極東軍リフチェンコ将軍（処刑されたトハチーフスキーの部下）が満ソ国境を越えて亡命してき、参謀本部ではこれと机を並べる。ソ連研究の雑誌を発行、独ソ不可侵条約成立の年には特集号に、東大の渡辺一夫などと並んでアンケートの回答者に岡沢秀虎の名がみえます。ということは、岡沢は勝野と会ってつぶさにソ連の実情を聞いているということです。

『微笑の沈黙』で岡沢について書いた 1993 年当時私はこの事実を知らず、これを知ったのはこの人の「名誉回復」がなされた 2001 年になってでした。私に加齢したこともあり、今日の私は少なからず岡沢に同情的です。逆にソ連の対獨戦勝に幻惑され、スターリン讃歌を奏していた人々の方が甘かったということになりましょう。私は勝野金政については『日露領土紛争の根源』（2003）で言及しました。

早大 露文科の百年行事で私にできることがあれば協力いたします。

Feb. 8, 2020

長瀬 隆